

コラム3 先乗り調整方式でボランティアバスを運行

現地のボランティアセンターの立ち上げ直後から、県内外からのボランティアバスが運行された。その中で、ひょうごボランタリープラザは、現地入りしていた兵庫県社会福祉協議会の職員とも連絡を取りながら、15、16日の最初の週末から、神戸駅発で佐用町などに向かうボランティアバスの運行を始めた。また、京都府災害ボランティアセンターからも、現地にスタッフを送り込んで調整を図り、22、23日の週末にボランティアバスを送り込んだ。

このように、送り出す側の関係者が現地に先乗りして調整するという方式を取ったことにより、受け入れ側の負担が軽減し、大勢のボランティアがスムーズに活動をすることができた。兵庫県内や京都府内では、平成16年の台風23号などで、日本海側などの被災地にボランティアバスを運行した経験があり、これらの経験が生きたと言える。

このほか、県内市町・隣接府県の社協やコープこうべなどが、まとまって現地入りするボランティアバスを運行、各地の消防団などもバスで現地入りし、団体受付が全体の3分の2を占めた。

ボランティアがまとまってバスで現地入りすると、車中で行きにボランティア活動についてのある程度のオリエンテーションを行うことができ、また帰りは活動の振り返りや地元活動へのフィードバックなどについても共有することができるメリットがある。

今回は、さらにニーズの減少に伴って、まず団体受付を先に取りやめるなどの調整も可能となった。また、佐用町では各地からの団体支援で作られた絆を生かし、佐用町復興支援バザーや復興フェスティバル、復興支援佐用町竹炭祭りなどのイベントが行われ、継続した交流につながることもできた。大量のボランティアを輸送する手段としてだけのボランティアバスではなく、絆を生かしたり、産み出したりできる手段でもあることも分かった。